

日本における女性労働者の史的背景と心的状況の相関関係

—ここ百年弱に及ぶ新聞記事の検分を中心に—

杜雨晨

(神奈川県大学院 経済学研究科)

研究目的 ～ 御多分に漏れず中国人である私は他の中国人たち同様、子供の頃から日本のアニメ、テレビ、小説、映画を見て育った。なかでも印象的な著作として、小説『負け犬の遠吠え』（酒井順子 著、講談社、2003年出版）がある。当該小説では一生結婚をせず、また子供を産まない女性を負け犬と揶揄したカタチで表現され、他方で夫をもって専業主婦をしている女性を勝ち犬として描いている。勿論、これは娯楽物なためデフォルメされたものであることは否めないが、この種の類のサブカルが日本では比較的多いことが気になっていた（理想の旦那様を描く無数の少女漫画の類はその最たる例である）。換言すれば、日本の男子たちが見る冒険、スポーツ、社会風刺漫画とは、あまりにもカラーが違いすぎると言わざるを得ない。とは言っても結婚後についての現実、誰しもが予想しうごとく、そうした甘いものばかりではない。実際にモラハラ夫、不倫、DV等のニュースは日々耳にする。そうした事象を聞く度に、どうして日本の女性たちは皆、己の力のみで強く生きていこうと考えないのか、そんなに夢多き事ばかりではない結婚生活に頼ろうと願うのか、離婚率だって昔と比べ高いものとなっているのに…と思わざるを得なかった。

他方で近年、とりわけ耳にするようになった子供食堂に関するニュース等において、それとワンセットとして貧困、なかでもシングルマザーの事例が多く扱われていることにも気づくようになった。そうした女性たちの声を耳にすると、自分は正社員ではなく派遣社員である、非正規雇用である、正規雇用されたことはないという言葉がワンセットとして出てくることが多いことにも気づくようになった。即ち、既述したような現象の背景には日本の女性労働に固有な、根底的な要因が何かあるのでは…と思い始めた。

調査方法 ～ ① 種々の法律も、② それに基づいた企業の具体的施策も、③ 好景気な時も、④ 不景気な時も、【女性の不遇性が一貫してみられるのであれば】、女は結婚すればよい…ではなくて、女は結婚するのが一番お得である…とする感覚・世論のようなものが醸成され、それを女は子供の頃から「女の子なんだから結婚しなさい」…と家庭内で叩き込まれ、その女の子が今度は母親となって、我が娘に「女の子なんだから結婚しなさい」…と、代々叩き込まれざるを得ない、そうした状況が構造的に作られてきたのでは…と私は推量するようになった。こうしたことが書かれている「書籍」は数多ある。他方で、それらを見てい

て感じるのは、アンケート結果や何らかのパーセント数字は載せられてはいるものの、実際の庶民の生の声そのものがあまり詳述されていないとも感じた。そうした国民の声そのものが連続と時系列的に綴られ、整理しうるもの1つとしては新聞記事（の投書欄等）が挙げられよう。

そのため私は、平成不況只中の1999年に行われた派遣法改正や1986年のJAPAN as NO.1としてのバブル期の男女雇用機会均等法から始め（代表例として、朝日新聞1986年8月12日朝刊8頁の短大生の募集時期が遅いことに関する声など）、1974年の第一次オイルショックの不況対策としての労働策である雇用保険法を政府が打ち出した時（朝日新聞1975年1月10日朝刊3頁の未亡人を雇用した場合には僅か月9000円の補助費が支給されるという案など）、はたまた1959年の最低賃金法が施行された前後（朝日新聞1953年1月19日夕刊4頁の内職の不安定な収入についての主婦の声など）、1947年の戦後復興のために労働基準法を施行した時（読売新聞1950年12月10日夕刊2頁の田舎のサーカス団に勤務する13歳の女の子たちの薄給に関する声など）、庶民、国民の声や心的状況を精査していこうと考えた。そうした法、また法を受けての企業の施策、景気の動向、それらにどう日本の女性労働者たちが振り回され、それらを如何様に受け止めてきたのかを乱読していった。戦中（朝日新聞1944年8月23日朝刊1頁の女子挺身隊に参加しない場合は高額な罰金を課すことについて等）、戦前の工場法（女工哀史時代）くらい迄の約1世紀弱程を吟味していった。

結論 ～ 無論、これらは学術書から集めた統計記録ではない。しかしながらまさに庶民感覚そのものの記録である。それらを略説すると、女性が一貫して国の御都合主義に振り回され、各企業なりにそうした法を解釈し、男性よりも低い労働力と一貫してみなされ、また女性を景気の緩衝材として位置付けてきた日本経済の一世紀が見えてきた。いま生きている日本人女性たちが、こうした100年を肌で感じてきたのであれば、言い換えれば、こうした女性が男性と比して一貫して不遇な状態に置かれてきたのを目の当たりにしてきたのであれば、祖母 → 母親 → そして娘へと掛ける言葉は容易に推察できよう。当の本人たちも社会人生活の端々でそうしたことを体感させられ、結婚しよう…と強く願うようになっていくのは必然だ…と、私は投書欄を見続けて腑に落ちざるを得なかった。